

■今は康定、昔は打箭炉(ダルツェンド)

2004年末から、2005年正月にかけて、四川省^{ガンゼ}甘孜州^{カンディ}「康定」へ、当地で育ったウリさん(本誌に随時執筆)の案内で訪れた。同行者は10人、いずれも個性的な人で楽しく旅ができた。康定は四川省の省都成都から西へ約350km離れた、チベットへの入り口にある山間の街で、都市部の人口は約3万4千人。「康定」は旧称、打箭炉(ダルツェンド)と呼んだ。私が以前読んだ、翻訳物の旅行記や登山記^{ターチェンルー}には、「打箭炉」として紹介され、四川省の成都とチベットとを結ぶ交通の要衝で、交易で発展した商業都市だ。

「“康定情歌”の“カンディ”だよ」と旅行前にウリさんにいわれたが、「康定情歌」という歌は知らなかった。中国人なら誰もが知っている作者不詳の民歌(フォークソング)とのこと。康定へ行くことが決定してからこの曲をインターネットで探しあて、聞き込んだ。パソコン経由でいろいろな曲を中国語版インターネットから取り込んで聴くことができる。日本著作権協会は、苦々しく思っていることであろう。試しに“日本国歌”で検索してみたら、幾つか当たった。各国の国歌の一つとして、あるのだろう。鳴らしてみると、間違いなく「君が代」だった。中国経由で「君

が代」を聞けるとは思わなかった。

さて、「康定情歌」であるが、歌い手の違うものがある。歌詞の意味は分からなかったが、旅行前にメロディーは覚えてしまった。

■高山病? と脂負け?

成都で一泊し2004年12月30日、専用バスで出発。この日は、山岳展望の目的で新都橋(地名)というところまで行った。そこは康定より、約76km先にある。したがって康定の街は止まらず、通過となった。新都橋へ行く途中には4000mを越える折多山(中国では岷も山という)という峠を越えるので景色は雄大だ。道々、車中からの展望を楽しんだり、随所で下車して写真を撮った。たどり着いた宿泊地の新都橋は標高約3200m、高原状のさわやかな土地であった。

すでに夕方なので、宿そばの食堂に行き夕食をとると、おきまりの白酒が出た。私は、飲むと危ないと思いながらも、少々飲んでしまった。高地でアルコールは御法度であるが、目の前に液体を注がれるとつい手が出てしまう。

食事を終えてからチベット風の作りの、宿に戻った。そして、まもなく頭痛が始まった。両眼の裏側が痛い。二日酔いなのか、高山病症状なのか判断が付かないが、動作が緩慢、呼吸は苦しくなかったが体調不良だ。さほど飲んでいないが、客室の構造はいわゆるドミトリイというか大部屋。女性と男性に分かれたが、私は3階に小部屋を見つけて使った。

夜の団らんで私のほか、何人か調子が悪く、胸苦しさを訴えた。道中で買い求めたボンベの酸素を吸う人もいた。それでも私はなんとか寝ることはできたが、朝になっても食欲がなかった。

連日の脂っこい料理、辛味に負けてしまったらしい。幸い食欲が無いのと、軽い下痢のほかは、特に具合の悪いところもなかったので、旅行には差し支えなかった。

明けて12月31日は、さらに西へ行って高爾寺山(岷4421m)までお手軽にバスで乗り付け、ミニヤコンカ(7556m)を遠望。夏に訪れると雲が多くて遠望を得るのは難しく、多くの善行を積み、強運が無いと見えない。しかし冬ならば、普通の善行と、並の運で展望を得ることができるそう。見た目の距離感としては、大菩薩連山から、北岳を含む白根三山を見るふうである。しかし北岳と違い、先様は凜とした先鋒で空を突き、さすが7500m級の山だ。岷の周囲は冬枯れした丘陵が連なり、今は動物がいない寂しい放牧地になっていた。日陰には残雪がこびり付き、厳しいチベットの生活環境をかいま見る思をした。

往路で岷を徒歩で越えるチベットの風貌の現地人が、



新都橋で泊まった宿、のチベット式民宿の「藏家音馨旅店」



康定の涌水。突き当たりは「水井酒店」という旅館があった

我々のバスに向かってヒッチハイクを訴えたが、バスは峠から戻ってしまうので乗せてあげるわけにいかず、せつなかった。

■印象的な雅拉神山

高爾寺山をあとにしてつぎは、「塔公草原」へ立ち寄った。小川に沿って進むと、景色はやがて高原状に広がり、続いて建物が見えてきた。長い塙を巡らした中に、大きくて立派なチベット寺院群が建っている。寺から少し離れたところには、門前町ともいべき集落があったが、西部劇の町のように草原から、突然始まり、突然終わってしまう。背後の丘はタルチョでにぎにぎしく、飾られていた。

寺院の後ろは広々とした、草原と山波が続いていた。手前の丘陵には、ごま粒のように点々と、ヤクが枯草をはんでいた。徒歩のチベット人女性が2人、背かごをしょって忽然と現れ、岸辺が凍っている小川を、巧みに杖をついて渡渉した。靴はぬれてしまったが、彼女らは全然気にしないようだった。

遙か山波から頭を出している、雅拉神山(5820m)が印象的であった。「山」という字が象形文字であった頃の「山」の字ようだと、ウリさんがいっていた。肩を張ったような、個性的な山形は忘れがたい。

■康定の街とホテル

夕方に康定の街に着いた。泊まるホテルは川べり建つ7～8階建てのカラカル飯店。街は谷川が作った谷間に展開している。日本でいえば山峡の温泉町のような地形だ。実際、近郊に温泉プール、ホテル、湯治場を併せ持つ「二道橋温泉」という施設があり、カラカル飯店と同じ系列会社が運営している。日本であれば源泉を枝分けして、何軒もの温泉旅館が川辺に建ち並ぶだろう。

街を分断している川は折多川という。かなりの急流で、水音高く豪快に流れていた。水際は護岸され、いわゆる三面護岸、両岸はすぐ道路で車や人が行き交う。流水は見た目にはきれいな水だ。この川は30kmほど下流で長江の大支流、大渡河にそそいでいる。

康定の街並みは、現代中国風の積み木のように味気ないコンクリート造りが多い。それでも、看板や窓枠などに、チベット風の色彩と意匠があり、郷土色を出していた。それとは別に、川沿いにすこしだが古い街並みが残っていて、味わいがある。見かけない建築様式で木造、瓦葺きだ。漢人が作ったものか。近在には木材にするような樹林は無かったが、昔は植生が豊かだったのだろうと思った。私がウリさんに

「これは貧乏人の家か」といったところ、

「そういう言い方はよくない」

と、たしなめられた。彼のいうとおりである。「旧市街」の簡単な言い方が思い浮かばなかったのも、つい貧乏人の家と



塔公草原から観た雅拉神山(5820m)、「山」の字のようだ



康定の旧市街、小規模の飲食店や手仕事の店が並ぶ。

品のない言い方をしてしまった。

夕暮れになり、地元の料理店で夕食となる。大晦日ということもあり、これと思うような飲食店は、家族連れや、若者のグループで、どこも賑わって満席だった。私たち約10人はウリさんの先導で、店のあかりにひかれて、一軒のレストランに入った。私は相変わらず食欲がない。康定の標高は2600mとのことなので、高山病的症状はなくなったが、食べる気持ちにならないのだ。今思うとおいしそうな料理を、そのときは、少量だけおそるおそるつまむだけにした。

ホテルに戻り、バスルームを覗くと、シャワーだけで浴槽はなかったが、使用中に冷水にならなければ、これで十分。鏡の前に、立派な装丁のホテル案内があり、何気なく表紙名を見た。すると「人民賓館」となっているので、はて名前が違うと思った。中はこのホテルの案内なのに……どうやらホテルの改名をしたが、備品までは手が回らなかったらしく、古いままですましてしまったのだ。このあたりはいからも中国らしい。細かいことにはこだわらないのだ。

割り当てられた部屋は、折多川に面した7階だったが、同室人がどこからともなくシャーッという音がする、といった。何の騒音かと思っていぶかしく思い、窓を開けて音源を探したところ、はるか窓の下を流れる折多川が川底をはむ、「せせらぎ」の音であった。日本旅館では風流音に聞こえるのに、中国の飯店だと騒音に聞こえるのは、私の偏見か？

■国家級風景名勝区「木格措」

明けて2005年1月1日。この日は「木格措」という、康定から北へ26kmにある景観地を訪ねた（「措」はチベット語で「みずうみ」、ただしもともとチベット文字には漢字は無いので、同じ発音の字を漢人が当てた）。「国家級風景名勝区」とかで、入園は有料で35元のところ冬季割引となり28元。入口のゲート小屋から出てきた青年スタッフが我々のバスをのぞき込んで人員を数えた。

バスがゲートから先に進むと、砂利道の林道はいつしか圧雪路面になった。まわりの林床も薄い雪で覆われるようになる。道幅は狭く、ヘアピンカーブ、急勾配が続くので、スリップ、転落の心配を運転手に変わって案じる場面が続いた。あたりは山岳的景観となって、サルオガセの垂れる黒い森が続く。北アルプス中腹の針葉樹林帯のような景色だが、見上げる山々は日本の山と比較すればやはり大陸的で、規模が大きい。黒光りする巨大な岩壁、青空をさえぎる褐色の鋭い稜線。

車道は美しい湖水のほとりで終わった。バスから降りる



ひっそりと静まりかえる木格措。背後の山がまぶしい



康定の街を二分して流れる折多川。

と、目前に広々とした谷間と湖、この湖が「木格措」だ。北アルプスの「白馬大池」を何倍か大きくしたような風景である。透明な青空にとけ込んだうす雲、その下に重い濃紺の水面が沈黙する。湖水の岸辺近くは凍結しているが、この高地（公称3780m）でも昼間の太陽熱で全面結氷はしないようだ。ここから、徒歩なり、馬を雇うなりして奥地へ行くことができるが（前日立ち寄った塔公草原へも続いている）、今は冬なので小道は凍って滑るし、厳寒季で行く人はいない。背後の高峰は、白雪をまぶしてモンブランのケーキのように鮮やかであった。春、夏ならば花々が咲き、木々の緑も鮮やかでさぞよいところであろうと思った。

とりあえずバスを降り、高みの途中まで歩くことにした。カラマツの林の中を続く道をゆっくりたどる。観光客は中国人がちらほらだ。ところどころに古い降雪のなごりが、凍結して油断ならない。ずーと先まで行ってみたかったが、見通しのよい丘まで行き、しばし佇んだのちそこからバスに戻った。帰りは下り坂、小道の氷結部はつるつるに滑り、神経を使う。若い中国女性が見事に足を取られて転び、中国人の若い男が転んで、持っていたデジカメをゆがめたのを観た。

きた道を康定へ戻る。途中の「二道橋温泉」に立ち寄って昼食。そのあと温泉プールにつかり、遊ぶ。プールなので水着を着用。脱衣場は楽屋のようなベニヤ張りの小部屋で、シャワーなどの設備はない。ロッカーは脱衣場にないので、衣類を抱えて廊下設置した男女共用のロッカーまで出向い入れる。

ロッカーの施錠法が面白い。小型の南京錠で施錠するのだが、まず受付で鍵と錠の対をもらう。鍵にはおきまりの輪ゴムが付いていて、遊泳中は、手首などに付けるようになっている。ところが鍵には番号などはどこにも付いていない。一方ロッカーの扉には番号が書いてある。仕掛けは、客は使いたい空いているロッカーを開け、もらった南京錠で施錠する。どのロッカーを使ってもよいが、番号は客が覚えるのだ。

プールの深いところは150cmもあり、沈みかけてあわてた。温度はぬるく暖まらない。2600mの高地なのですぐ息が切れた。地元の客で結構繁盛していた。

夕食はホテルの食堂でとった。相変わらず食欲が無く、いろいろ食べ物が出て、いろいろ食べたいのに、残念であった。

夕食の後は皆で、康定に住むウリさんのお姉さんの案内でチベット風の歌舞を供する店に行った。ドアボーイに案内されて入った暗い室内には、舞台を囲んで、テーブルが並ぶ。出し物は予想通り電気仕掛けで増幅された大音響が充満。招待してもらって嬉しかったが、大音響は苦手である。



跑馬山からの眺望



跑馬山索道とすり鉢の底のような康定の街

■水が豊富な康定

中国西部は、北京時間に支配され、冬は8時頃にならないと、明るくならない。早起きの私としてはこの傾向は面白くない。東京だと7時には明るくなるが、ここではまだ夜更けの暗さだ。それでも6時頃には寝飽きてしまい、着物を着て暗い街を散歩に。外では、早起きの人々がポチポチ活動を開始していた。谷間なのでずいぶん冷え込んでいるが、乾燥しているため、車の窓には霜は付かない。暗い街を歩き回っているうちに、いつしか明るくなった。

とある街角で、湧水を見つけた。水辺はものを洗えるように、石畳を敷き詰めてあり、設備は立派だがゴミが目につく。日本にも、街角に湧水のあるところが多いが、いずれも掃除が行き届き、町の誇りとしている場所になっているのに。ゴミがあっても平気なのは、自分たちのものという、自覚が生まれていないのだろう。「康定情歌」の歌詞にでてくる「跑馬山」の麓に“水井子”という水神様(?)を祭った建物があるくらいなので、康定は水には恵まれているようだ。

■跑馬山登山

ホテルに戻り朝食の後、「跑馬山」に登る。登山口までバス

で5分。この山にはゴンドラも架かっているのだが、私は歩きたかったので、皆に同意を求め歩くことになった。跑馬山の標高は公称2900m、康定の街が約2600mなので約300mの程度の標高差である。道はよく踏まれていて迷うことはない。枝道もあるが、どれも山頂へ続いているらしい。ところどころ岩の露出した山道である。地元の老人や子供もちらほら目につく。参拝や健康目的で登るようだ。

ウリさんは40分が標準的な所要時間だといったが、ゆっくり歩いたので1時間少々かかった。植生は近くのほかの山と同様に貧弱で、小振りのマツのみが目立った。山頂近くになかなか立派な仏教寺院があり、日本各地にある山中の寺と雰囲気と同じようだ。跑馬山には、康定南无寺、康定安覚寺、康定金剛寺の3つの寺があることになっているが、それは帰国してから分かったので、そのときはどの寺が何寺かは注意を払わなかった。

山頂は平らで、一部広場があり、跑馬山公園という名の苑地になっている。山頂にあるのでちょうど日本の城址公園のようだった。旧暦の4月8日に「転山会」というお祭りをここで催す。チベット族の馬術、武芸、踊りなどでにぎわうそうだ。今は閑散期なので、あまり人出はない。小屋がけの小規模な土産物屋や、ウマやヤクに客を乗せて料金を取る数人のチベット人が目につく程度だ。日本の観光地と同じようにスピーカーで音楽を流していたが、“康定情歌”ではなかった。私も試しに、ウマとヤクに乗り(同時にではない)広場を一周、観光客を演じた。ヤクより馬

の方が、なめらかで乗りやすいと感じた。私が短足なのでアブリに両足がかからず、あせった。かっこよく乗るのは難しい。

山頂広場の一角に大きな白い仏塔があり、その土台に上がると雄大な眺めが得られる。康定の周りは褐色の4000m級の山々がすさまじく取り囲み、大陸奥地を感じる。頭だけ出している高い山々は雪を反射してテラテラと白く光り、こうごうしい。5000m以上の高山に違いない。

下山はゴンドラで降りることにした。2人乗りのゴンドラで赤い塗装に「跑馬山索道」の白字が入っている。赤は中国人の好きな色である。索道は2002年7月完成、全長720m。48基のゴンドラが付いて、総工費1500万元だそうだ。運賃は往復30元、片道が20元……片道だとかなり割高だ。乗り場で観察すると、窓ガラス付のカゴと、窓ガラスなしのカゴとが交互に回っている。窓付は景色を見るのにじゃまなので、ウリさん以外は窓なしが来るまで待つ。乗り込むと、すこぶる遅い。けれど、その分景色をゆっくり見られるので文句はない。見下ろせば昨日泊まったホテルや、買い物をした広場などがはっきり判る。目をこらし、すり鉢の底のような康定の街並みを心に焼き付けた。 (完)